

研究テーマ	〔Ⅱ 想い（発想・想像・構想）を広げ、深めること〕 粘土による立体作品制作を通して感性を働かせながら、 独創性豊かな表現能力を培う指導法 ー 粘土を用いたランプシェード ー
-------	---

常陸大宮市立村田小学校 教諭 川又 朱実

1 研究テーマについて

新学習指導要領では、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」が教科目標である。新たに今回の指導の追加事項となった「感性を働かせながら」では、自由に形を変える粘土は、自分の感じ方やものの見方、直感を表現しやすい。頭で考えただけではなく、手を動かして何度も納得するまで形を模索する作業は、より構想を研ぎ澄まし、作り出す事への喜びに結びついてくる。そして、その活動を通して「イメージをもつ」資質や能力を育てていく事になると考えた。

今回は、粘土を板状にし、変形させることから想像を広げて、空想の生き物をつくる。また、その中に電灯を入れることで、全体の形ばかりではなく、光の見え方にも工夫を凝らし、曲げたりねじったり切り抜いたりして自分の思いを表現する。

また、完成した作品を設置し鑑賞する場面を、学校の建物全体とする事で、より作品への思いを表現できると考えた。児童間で鑑賞しあう事で、制作を通して培った資質や能力をさらに切磋琢磨し、次回の表現活動へと結びつけていきたい。

2 実践例

(1) 題材名 粘土で見た事のないような生き物を作ろう（ランプシェード）

(2) 目標

- ・ 変形させた粘土の板から思いついた生き物を立体に表す活動に意欲的に取り組もうとしている。 (関心・意欲・態度)
- ・ 粘土の板を曲げたりねじったりしてできる形から、作りたい生き物を思いつく事ができる。 (発想・構想の能力)
- ・ 粘土の板の厚さや曲げ方、部品の付け方、へらなどの用具の使い方を工夫してできる。 (創造的な技能)
- ・ 友人の作品の表し方の工夫をとらえている。 (鑑賞の能力)

(3) 題材について

ーテーマに迫るための手だてー

- ・「見た事もない」という表現で、児童の創造性を揺さぶった。

「これでは、見た事がある。」という分かりやすい観点なので、自分なりの工夫がしやすいと考えた。手で模索し、頭で考え、自分なりの納得いく形に作り上げていくのに、取りかかり易い表現とした。

- ・粘土を用いる事で、何度も付け加えや作り直しが出来るようにした。

粘土は、管理さえしっかりしていれば、何度も付け加えや作り直しができるので、自分の思いを練り上げて行くのに有効な素材であると考えた。

- ・途中で友達作品の鑑賞会を短時間で行う。

ある程度作品が出来た頃を確認して、2分間だけ友達作品を自由に見て歩く時間を作った。友達の工夫した所や素晴らしい表現を見る事で、更に自分の作品に生かして行く事ができる。ただ、真似になってしまう事が懸念されるので、作品がある程度出来上がった頃である事と、2分間である事がポイントとなる。短時間の鑑賞なので、集中力を持って児童は友達作品の良い所を見抜くと考えた。

- ・鑑賞場所を学校の建物全体とする事で、より作品への思いを表現させる。

オブジェとして考える時、背景も作品の一部となる。自分の作品への思いをより深く表現させるように、学校の建物全体を設置場所とした。

- ・鑑賞カードの工夫

鑑賞カードを、友達作品と自分の作品の2種類にした。友達の工夫点と自分の作品への思いを書く事で、次回の造形活動へとつなげたい。

- ・作品の保管場所

出来上がった作品は、授業公開日に保護者に箱に入れて持ち帰ってもらう事にした。その後、家でそれを飾る事もお願いしたい。周りでその作品を大切に扱う事で、児童の作品に対する姿勢や次回の製作への意欲につながっていくと考えた。

(4) 指導計画 (5時間取り扱い)

時間	学習活動	評価の観点			
		関心・意欲・態度	発想・構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
1	ランプシェードの役割とLEDライト（光源が七色に変わる）の使い方を知る。	進んでランプシェードの役割を理解し、光源を利用して作品を作ろうとする。		LEDライトの使い方が効果的にできる。	
2	粘土に触れてその触感を楽しむ中で粘土の可能性を見いだす。	粘土に触れてその触感を楽しむ。	粘土に触れてその触感を楽しむ中で、粘土の可能性を見いだす。		
3 4 本時	粘土を板状にし、光の見え方も考えながら、曲げたりねじったり切り抜いたりして自分の思いを表現する。	自分のイメージに合うように、曲げたりねじったり切り抜いたりして意欲的に製作する。	自分のイメージを粘土に触る中で膨らませる共に、友達作品を参考にしながら納得いくものにする。	粘土の粘度を保つ為の方法や、扱い方、粘土べら、のし棒の使い方が分かる。	友達作品を効果的に鑑賞し、自分の作品に生かす。

5	鑑賞会を開く	友達の作品の良い所を進んで鑑賞する。	自分の作品の思いが一番通じる所を、校舎の中から選んで置く。	友達の作品の思いを感じとる。
---	--------	--------------------	-------------------------------	----------------

(5) 本時の学習

◇ 目標

自分のイメージを粘土を触る中で膨らませると共に、友達の作品を参考にして納得いくものにする。

◇ 準備・資料

粘土，粘土べら，のし棒，爪楊枝，ビニール袋，ぼろ布，参考作品（教師の作品）

◇ 展開

学 習 活 動 ・ 内 容	教 師 の 働 き かけ (○), 評 価 (◎)
<p>1 本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 粘土で見た事のないような生き物を作ろう（ランプシェード） </div>	<p>○「見た事もない」という表現で、児童の興味関心を喚起させる。</p> <p>○実際に参考作品を見せることで、作品のイメージを膨らませると共に、出来上がりまでの見通しを持たせる。</p> <p>○実際に粘土を扱って見せる事で、用具の使い方や、注意事項の説明を分かりやすくする。</p> <p>○粘土はそのまま置くと、乾燥して使えなくなる事を言い、ぼろ布を濡らして絶えず粘土を包んでおく事と、手も濡らしながら作業を続けるようにさせる。</p> <p>○たたら板は、幅を制限してしまうので、均一にのし棒で粘土を伸ばして扱うようにさせる。</p> <p>○膨らみを加減出来るように、粘土の下にビニールで包んだ LED ライトを置くようにさせる。</p> <p>○穴の開け方で、光の効果が調節出来る事を確認する。</p> <p>○もし、壊れたり割れたりした場合は、どべを使って修正できるように準備をしておく。</p> <p>○真似にならないように、ある程度自分の思いが形になったところを確認して、2分間だけ見て歩かせるようにする。</p> <p>◎自分のイメージを粘土を触る中で膨らませる</p>
<p>2 粘土べら，のし棒，爪楊枝，ビニール袋，ぼろ布の使い方とその役割について理解する。</p>	
<p>3 各自製作をする。</p> <p>(1) 粘土を板状にする。</p> <p>(2) LED ライトの上にかぶせるように、粘土を置き，付れたり，削ったり，穴を開けたりして思い通りの形にしている。</p> <p>(3) 製作途中の友達の作品を見る事で，自分の作品に良い所を生かすようにする。</p>	

4 後片付けをする。

5 次回の学習課題を知る。

と共に、友達作品を参考にして納得いくものにできたか。(観察, 作品)

○粘土が縮んだ時に作品が割れないように新聞紙をその下に置く。

○乾き際が一番壊れやすい事を告げ、扱いに注意するようにさせる。

○道具は洗って良く乾かすようにさせる。

○次回鑑賞を行う際は、自分で選んだ校舎のどこかの場所に作品を置く事を知らせ、置きたい所を捜しておくように指示する。

3 成果と課題



A (板書)



B (粘土を柔らかくなるまで練りながら素材との触れあいを楽しむ)



C (のし棒で粘土を板状にする)



C (粘土べらで周りを切る)



C (粘土をどべで付ける)



D (光を出す穴を開ける)



D (LED ライトを入れる)



F (好きな場所に展示) F (鑑賞カードの記入)

製作に入る前に、粘土練りを兼ねて粘土に十分触れ合う時間を取った。児童は、夢中になり粘土練りをした。その後、課題を確認して成形に入ったので、目標に向かって集中する事ができた。

(写真 B)

参考作品の提示だが、突然引き出しの中から見た事のない生物を出したので、児童は、驚きの声をあげた。その勢いに乗って、要点を絞って黒板に確認事項を書き、早めに作業に入った。参考作品を出すタイミングが児童にやる気を出させるポイントになった。

(写真 A)

道具の使い方を実際に教師がやって見せるのは、効果的だった。児童を集める時は、「何時何分になったら、何班の所に何分間だけ集まる事」という約束を、前もって話しておいたので、児童は、時計を見ながら作業が切りよくなるように、準備して待っていた。そして、手際よくやって見せるのは、多くを語るより効果的だった。児童は道具を上手に使って作業を進める事ができた。

(写真 C)

成形に入る前に別に時間を取って、工芸としての美術品の鑑賞も兼ねてランプシェードの役割を学習したり、LED ライトの使い方を話しておいたりしたのは、効果的だった。どの様に光り、穴からその光が漏れた時作品が変化するのか予想をして作業を進める事ができた。

(写真 D)

作業は、粘土板を使わずに作業机を広々と使った。児童は、体で粘土に向かい合い集中していた。要点は板書を見て進めていたが、1 グループ 4~5 人というのは困った時お互いに助言しあうのには良い人数だった。

途中の友達の仕事を見る場面だったが、ある程度自分のイメージが出来てからだったので、真似のし合いにはならず、良い所を自分の作品に生かした例が多かった。(写真 E) は、出っ張りを筒のように伸ばすという発想を自分なりに生かして作品に取り込んだ例である。

鑑賞の際に展示場所を自分で選んだ事は、より自分の思いを表現するのに効果的だった。教師の考えもつかない所から、沢山の作品が顔を出した。図書室の引き出しから出てきた時は、誰もが驚き悲鳴をあげた。本人は、思いが伝わってとても喜んでいて。

(写真 F)

鑑賞カードも友達の作品に対するものと自分の作品に対するものを書く事で、より作品を鋭く見る目が育ったように思う。自分の鑑賞カードに冷静に評価を書き加えた児童もいた。また、次回への課題を見つけた児童もいる。

(ワークシート G)

出来上がった作品は、保護者に大切に持ち帰ってもらったが、クリスマスの飾りになったり、玄関飾りになったりして児童も喜んでる様子を保護者から聞く事ができた。

課題としては、今回は粘土は紙粘土の素焼きのような効果が出るものを使用した。本物の素焼きを体験させてあげたかったが、今の教育課程では時間の確保が難しい。ここで多くの時

